孔通釈

王教論

特別
へ13
3633
27

へ 13
號 3633
巻 27

昭和三十二年六月八日
宮川曼魚氏寄贈

日本文庫

一

口説者ども貪欲銭ども素
秋風起りて帷子飛鳥川
て借皆せぐむ予ら神代釋尊だら
けみて困窮ゆら孔丘ゆら道子ん
せうと相後わるまの惡水名ん十
博場の利急ゴ居催促しますす
赤白川の勢力解のゴ紙の書出し

を打糸かゝ始末使身迹を没して
後在家の悪宿増長して姉妹若
め奉り盃を傾んと欲ぬへ彩雲の
嘘贅よ仏せ貝へ卓上の硯蓋を引
寄せてゆく睡落の小冊を著て
と不間の打身よてよこぞり絡ひ
茶間ちのをれかゝべを訳くてう

ちくあゝ大宮てんくとゝろく
勧られれへ予まゆきゝとゝ
てきゆんして曰燕十ゆんぞ大通
のんを知らんや言ふ身徒堂
文勢を倹俱してゆの孔板遍間
もゆく鉄鉋やさゝに打ゆくゝ
たる一冊を大文輝巳方の先生の

に入れて裏門好の広屋の髭号
をはりして花んご彩板彩吉ふ
いとゝ心宮よ大門に大堤下薜羅
館の耕書堂下質の徐州を歪
奉菜の如し

一元亨三教一部
上りう唐いろよ

道子孔子一日儒書ふ
唐書伊尹伯夷ふ
但しゝ
山人智
紫麝黄屋の肌ふ
但し微前倡廉の絵あり

通神孔釋三教邑

前座　三聖邂逅

四季繁華曰孔子名丘仇名通其先通人父者行了簡母者俠氏以其女郎二十二歳年明之歳十一月庚子生孔子於此昌平橋水道爲児嬉戯常唱河東桑青樓及長成意氣浪浪度度也ふどゝこゞけゝゝ嘘みゝて髭長の骨長爰小の歯小もあ

書之　唐来参和

倩人　志水名十　唐氏長則

えの堅屋の石級金吾殿も嵬をわひて隆
系をべ元文宣王もを幸学上る大通の乃
隆賞ん多りーうべかーうかれの多えく
て移かのの人んはたたく浮学をおりひ
移ひよ今ハ昔と表ひあるる物る滑稽さ
る学の中に長勢えろて仁義禮智信の文
学青表紙のる古を自業自得よちんう
きんより意京の一すく幕学んで時く

巧言令色の面をもつくんと先大日
本華北東都昌平橋の出店小引越し
風流英藻を尽して二階三階よ家居を
立て邦君樹塞門といふよ習ひ庭よハを
木を植込其物好利休宗旦よ物を呼さ
せ門よハ東江流で大通亭と云る額を
掛る路を人を石仕ひ六ハ義も何不くゆう
禮ハハ初賀表三令級日拙日北拙びの

而方樂へ將ゝして義経河東節とかれを
射へ変じて楊弓と称ゝ兒御へ浮雲うゝ
ぼつぼよ家しい書へ細見滑稽今小眼さ
らし数へまひらゝて色化金のメくゝと
かゝ悲髮天窓を出田よ結ゝせ着物さけ
長く対膚廣きを不厭繻半の衣紋首
小豆とけ茶力徳ふゝて髮のどゝく扇で
ちく浪煙管脇さぐり天生通放事とる

場の梟初松魚よりうるく飯こ盛ゝて
当世乃を好このくで通不孤必有隣其ところ
南瞻部州豊秋津洲地神五代
天照皇太神宮も甚だ蕩楽ふるしく徧
ゝず侍よりゝ和歌家も礼儀さを弁ひ児
屋根の巨礼練言も久ゝいゝ実ゝ不色云
めとえゝけさせゝゝず半ひとさを弁ひく
ゝくもえくもゝ尚ゝくゝ三トゝ重門不入根

清澄と拂ひ出しーふぐ城も遠くなる繁紀
ぐなより八重桜のとぐ間のぐ紀僥倖小掉尉
の八ツ耳小笠あ紀云訣よこ間り絡ひしーふや
宮よ立きり紙く学えしーふ京良や春日や三
輪の神の日三日と夜と明しのひーふぐ八百万
の神達神代ひみたとひる天う京よ集り
給ひはわ後のうくたひよ伊勢の太神御被
箱を背負ひのひ山紀文宣王の而の紙屋子

とぬり給ひーふどもはんかまうぞ紀神酒
の一口も石あぐると一すぢえへ間雲よ釣けよ
驕れよ春あ間くと毎晩く孔子とそれ立
柱里一のこひくり給ふえより孔子もこの
めるあれい茶屋紙者の付屋米うよ売
の仕兵まで表向をへ神の名で皆懐より出
して世話を仕ふくるより今の学よ学をと
人の振舞まて柱ぶるを神とやいふふん

ひしをみ初時夜おそれ指も風よさそひ
尽しておさびしきれはうらめれハ孔子ハ炬燵
よりおろりかろう水酒子よ三味せんをもてア
節かどふくして居ものハ太神ハタアネ子ハ
その侵ぬりと白川夜永子踊ハ壹所ゑうと
にけどうこかど廃ろたらひ座かどきれい
よ掃除して仕ものひ 子路ア 皆てきれいよ
誠よ日こハ新ざ 孔子 はなく侍くコレ 孟子モウ

何はすぐと思ふおきろせくく 太神 ムハ今掃除
ひ義をこんて居さのを 孔 弔ハきろい皇
疎ぎこひざ更ざうう寧弔かどをべけじめ
汁をこんせるハる 太 モウいうさ酒は目覚ま
てもいぶんざろふ 子 モシ 太神さんおめくの
あさ夜よハ紙ざけひて居ものて 太 ホンニナアニ山恵の
頭よ紙ものるだ 孔 孟子の事を太神くと云
へで金ざあるよあざせ 太 太神くといふるハ

よしてくれなく居作のお上でへちとそるる
へか 子 そんあら神さんとうやせうう 孔 ソレテハ
どふろ女房のどふぞトうふく 子 ソリヤアそふと
タべ米を一俵うひでまゆさ 孔 今飢饉さ
のぐそろ大ぶ豆ろぐぜ飯不厭精ぐ 子 今月
へとんぐ入ゆさ是でへ陳次来の通人越よ
窮そぐ 太 コレ子路ム居作のおとものぐから
ぐ米の呑へちと瓦ぐいさそれよけても

私もとうして居てもけさう孫くりんぐ 孔 富
貴有天そんふ事ふそんぐゆくとさろもゆふ
弔も蘧伯玉やこの子路ら小男の不の掛人
ふをあつて方て盗殺したれども拾る神あれ
で助る神ぐよろて司馬桓魋ぐ殺そふとうさ
とはゆよあつて自分出を腰縄で縛さ事
ぐあつさろけ 太 ソリヤアぐふーて 孔 陽虎よ面が
似てゆるそゆで人ちぐひさ是ふへおれも大

雅淡さ 子 公治長さんも行くさでこれたりや
せんろ 孔 あれも人ちがひさ 太 それでも今で
世常でもおろて傾城でも笑てゐるへおお
の器量ざよ 孔 きさアゆうだろうんざろねつろ
今ゞ半ひさろぬく 子 ホニ 音國やろう質の
あゞれの書付ゞ来中た狐の袤へ不意京ナ
ねゞ利上げをせずと流しあんしか 孔 ム お
つやアたーう玄年の八月席菜の時立てさの

ざえ利合せて三ゐざろふハア 三両の質時哉
時哉 太 ろうちも代ゐゐづりの天の逆戈を
ろうして金カそして三種の神宝も二ろへ
流めて今でおろのへ芝てゐる十束のけ
大力ぞろうさ 孔 ミテ ソリヤアイんゐたろうさ 太 皆
か大日本老言京(苔ちうしてゐびゆうお
こゐ立ざろか 孔 富潤屋ざろ我美小だも見
徳をうんぞ昌子ゐもちろと笑てゐんさろせへ

太 今を感應寺をうてゐんさゞ大巽感應
離坤兌乾 孔 そんゐんくやハ百萬の神さらく
ゐんでゐをでも仕て世くべいく 太 ちんか
事にでもゐて新世界をうとふと思つて
八幡へけに祈んで参り中た 孔 時小モウタ
食ごろふ行んでうちひのいゐくの 子 今
釣のおまりれ羊の冷汁小豚の味噌ぞけ
さ鶏の炙燒でもうちらくやせうう 太 鶏へ

おれいさらわゞ 孔 待さろせくゐんぞあんゞが
おろふトいふわうう釈迦や来時仏のけゐんとおるゐんう
ぜうに御ゐをゐとうをまろ乳るもとろう先
孔 朋遠方より来る事ありまさ楽しかう
ぞや 和尚ゐんと思つてマア供をべくゝ福ナ
釈迦 そんゐうそふしやせうト行やう来るゐ
云はけてうくそ
太 これい賓人よおろか不でお国よかうさ
釈 ホンニ孫ゝしいゝ坊をぎろひごろもか
のづうそふぐ義ゐかつさ 太 いやうをいふ

ゆゑさ 孔 はは英雄豪傑の出るハ
釈 アノ須達長者ハ奇堂の寄進を粧と
ゆゑさ 孔 欲心成佛ハとかくゆゑの 太 ろろ
くゞ事ハ法の万事 御堂濯川 流〜て
又蒼婆扁鵲と化る家ハ中の町ろ 釈 まぎ
袖ハ紅不ゞおれども阿羅漢ハ名代
を出した内ハ玄賞女色黄金の肌より
遥雪の肌ろあり〜く 孔 きゝ斗り居て

も歴〜莫〜とてさびしくふ 太 おんでも
今夜ハどひとくゞ和尚もそのたりでき
さつか 釈 ゑ〜囊中ハ空〜ぜ 孔 それハど
つこひ不侘取知ろ所 釈 ありゞてハそりやア
ぞふーて 孔 和尚も異端の虚無寂滅の嘘
ぞりりをひて紙く狂言をきくゞおれも
又ハんさつせくアノ師匠をうたのめしてゞく
ろ今ゞおれども 釈 師匠とハ 太 ソレ是ハよ

陸小及ぐり席よりぬぐうかどぐぞふりでは
中野帝がまかどをとりて立上よりとあ
たよ我し三安之歯とハ利合ぐらとたら
まぐ不 孔 コレ野夫をいろいろもんか伝でも
貸をかう借るが可也 釈 是借ハ法方の赤
栴檀を皆森釈迦として亜さ 孔 とでの
ぢまりいそんか事さ先生で猫牙よ糸
て恐小浄ん我よ者ハそれ通う 釈

ありがそく 太 ろうちがといつハ日ぬざと
いふに癖があると呂くを和尚も法法のあり
ぐひろに癖ざの 図 そんかむざハをのて行
かさるかう今かう駕を三挺云付ゆせう
ろ 孔 君賞よ行時ハ駕を行さぐて行ハ
不色をこうろしゆんか 太 によ諸くの不
通をいふとものよ法くのゆうを呂ハ
ず 釈 口小法自の三妙の海をけてんく

う麿画

で せうちをてく 孔 酒へ無量不及乱和尚も
よく呑さぐるコレ島子山田屋へ梯をした
あやゃあへら 太 被つてゐても曳泡連が舞つて居
ゆてゐれども一番出因よりけゆせう 釈 酒へ
上品ろの 太 サニ芦原さ割よ水穂を入るから
安国とんぐあふそと云あらう吸引よせてさらく
子 ちんあらけさぐ去身をりつて乱て教乱し
やせう 釈 ほかでふ天蓋といふ布を 因 結と云て

孔 マア そこらをちらとかさ付さうせ入席正し
かるされど不居ざ 因 けさしらちらひ落ぬ
後へべ坂といふ坂へあらゞと呂ふ 孔 筆先よ
乾坤の揮出を不ぬあり 釈 和光同塵ろ
ちふほゞけるの 因 ホニちゞくむさく老子が四
へ行つさようぞ 釈 老子や荘子ふへ久しく
あらく 孔 周へ行てそ行てるゆがあつさろ
け 因 ホニゆゆふと呂つてへ云まる新四へしよ

ゑてかう 釈 一簞食一瓢飲かどくらうずに
斗いつ男ぐが今でも貧乏の 孔 既と聞て
枕とそるを楽くてゐよ斗居ゆてゆべ
かゆつさ 因 おわくぐこの方でも国蓮といつの
人いあつかんの 釈 おいいつめべらがうに祝
ゆ孝行かゆつさ一生ようらくいゆくゆせ
ぬ上ゆのおうくゆ路徒利と 子 サアくゆをして
ゆくくゆけてきるる
ゆくくゆ鶏い孔ざことゆくくゆ思つて孔もゆ

てゆくくゆでいゆ微生高ゆ正でかりるよいゆ及べ
ぬく 孔 コレ料理かう切目正しかうざれを
不喰ざぜ又例のぢくむを忘やくせ是以君
子い庖厨を遠ざく 子 久くいゆんざきくと
せいくく斗笑かせくゆ如来さん 釈 イヤゆ語
ぐうとろちくのうせくゆれが切らゆ 子 十二廿
ぢくくが志ゆす糟を料理ぐやアなく 釈
あまをあかどるの檀特山の阿羅茶伽

羅漢の夫仙人のたくと料理もちさ物ざ
ぞよこいいかく 太 おれら湯玉の釜ぐ小へ
て居るちづざかんを付さろせく 孔 先別仕て
玉中たサアく亭主役小はじめて和尚へさし
ちやうト一そいのこ 釈 どかくも出先へく芝へい
らひけ報酬でござりはす 太 おきやアぐれ
トいふ拍子よ 釈 南無阿弥陀佛汁をこがーた
はぐこがれる 孔 汁といへば達ア汁へ
神も南無三宝といく
かぐらめた恨こ重ちる

義るの 釈 ぬるふかぐんまい赤よりつて
者よ九年毎斗りつて居るうかそれで
も不立文字教外別伝かどく意家か
ふを楽ドて人をべ碎と斗りんて居るよ
太 不許禁酒入大門と言ものさをんてい
好でかくてどふもるものぞ 孔 おらがちう
でも季氏かどへ山事で大ぶ尚さそふ
で八一の利合で金を方こへ出そうか 釈

ちと偽りてくの 太 偽さくれおくゝげ方の大
已貴よそふ云ねく 釈 大おかむちとへ 孔
大意よ 釈 おきみへちとさてざね 孔 たし
うツレ天竺よ居る時い摩訶迦羅とゆう
えろそふぐ ナニ おいつが云りくて出さて物
ぐ 釈 そこへ怖婁那の弁舌ふ文珠の知る
志でうたのめすりか 孔 それすり是子夷
屋三様よおれゞ仕送りを志て学ひさい

太 ろろちゞ代の雷の居ろ中居の居よ
性ってえてよへりろ逢りゞりるひろし
おきも春日小八方あわゞ偽てたぞれと
れふぐ 子 性の中ゞざゞおいをさゞゆたか
和尚さん 釈 彼岸の中ゞ学ておれきるこ
きへりふ一ッおさへふ 子 おいのおさへが
ろりめろ 釈 おきも海坊主の梅漬をこへる
ゆうよおろさてあろい偏袒右肩和尚好

物をわく 孔 孟子よりんせると 祖裼裸裎とろ
てうぜ 太 おとしいくぢ モウ 入わるよりゆした
皆 ホンニモウ おそくあるこさ 釈 ゑりなどころろわど
けよ 観音をさそひ出そふろ 因 おりろいさろ
ひそうをあやがるうういあくほうい 孔 その
そどよ合へ満とあそう候様を賞せている
のある男どのめを 釈 名みあふ多ゑと自
かうえんをたひさわさ 太 場面ぐうどかうゑ

かそどこ 釈 アレモ上恐屋田村屋一八余程ろこ
よ 孔 松屋のかきたどが而でそそうくゑを
ちうたそふど 太 伊ぐさう女のよふなう
をそて居る人どの 釈 それうり島ふのる
を凡夫が女どと思て居るぜ 太 洛西とた
ふどるて女う男うりろねくのさ 因 変生
男子どやあるめくし 孔 時よ合どとぐしい
氏火流布の羽織を持て初て八九ゑ偽

て未さろせくるを踏がう 国 それでこそあった
ほうりもとめくぜ 孔 朝よ晒落をそこして
夕ゆふ死すとも道を聞くべし 国 それをふ
ざるれども 孔 ハテさ 聖宅を家貧よ入ると
金ハ滿と出まるらふ 国 それも清ぐ極り
も高くよ無遠慮とたいとおまく云ふそろ
さじやアねくう 孔 予ハそもぐた不ハ天厭く
国 羽織を契て皆屋よきるとたハ困窮如

たりぐごいめくはゆ ひいとこぐら 釈 そこんや
くだの 孔 さ人ふしてさ病あるるさ 国 か
きハ抜ぐ空蕎ふくさ行さらたハ神樂ろ
祢豆蕎麦でも喰ふ 釈 そんふ下畢を云
ぐと行ぐけよ正直へ高ふ 国 正直へ一杯
の盛よ呈らずくどもけひよ神ぬの
隣をかうしろ 釈 ぬけよ今夜の世界へ 孔 青
楼へられさる 国 何屋よ仕よふ 釈 おれハ

芳町から揚屋町へ銘日九屋う西へ
外へ行ねく 孔 ろちふ不く斗り ゆくの 釈
阿弥陀とむ ゆそく 内西へ行ろさ 太 そ
この大和屋うう 和よ 茶うて 場とちやせう
孔 茶やへ毛湯屋よちふろ 大 ひてへちう
ゆふとそろてゑんよう 孔 ゑふ神のようよ
もねくあ ゑへモウ 西ねくせ 釈 ひろあやのう
孔 もれへ黒河う不のひうくふちふう 釈

ゑんでも一ゆ又して一ゑうへいせ 太 のちろんの
事さいろて戯前かどへどふでおろふ 孔 よ
ろろふく 太 和尚さんへ三国といふおいろん
をさびけようう 釈 三どく 伝来のんめちで
てうどい 太 ろちがひこくよおめくが
孔 のろこうようろふくサアくちゑを
さうせへトミおくかと茶ろる不 孔 宰我子貢といふ
矢をふろて拾ゑんどひて来ゆた 孔

それハ出来くそんあらくあめくるす
ゝ者もモウよしく 釈 孔 遊者如斯夫
不舍晝夜 子 そんあらおちづゝ小あした
ゝ月小かりやせう

旧事記嘘八百巻萬八牧目曰天津浮橋
之邊有數多娼家通之客神銀漢乘扁舟
云中ゆゑ天野屋の伊特冊とゑんゑつゝ全盛
のおいらん小伊特送ゝる鶴鈴のとりのうて
浮橋での一すのゝより涙て小くゝかゝせ
ゝ引ひ大數未社の神さゝ引逢雪の居後
牧戻り若紙をとゝらくて来る夜もく揚

ぞあもそくのたまらぬ事ありしとて多く
の今を出して有うけしてたのころ海の別
荘より因ひ遠見よのこと朝暮ほのくられべ
ばと又國常立尊のたりふ中う我ハ見一生獨
身ありそれより引くるがるまひ男女交
合のりを始め四へハ根うう混こ沌ことして
くらんあらひ仕方と甚だ反海のく
て二柱の出神をたひよ遠う國よ流しのふ

女神男神も今の事よりたらく思ひなりふ
もうむらしの事ありれハどのようふ仕事りの事
もあるべきなら式事ふ始めて八一門一家こいた
とぞもあらかねの荒地を見立天降り名
を立て妻女屋をせんりのとそれより而あ
足あより女神をあらめひてたひよ娼家と
ぶし作ふされハ神の左迂さ世ぶらひ一不ふ
きべとて今の学ふこと神湯とゑ国

とし是和国より流れの君の始なり其のち
人の学ふいとろてにに家の津其外所々の
遊こあげくかぞるふいとあらず又東北
小盛んありしに後会河家より彩をたらぬて
娼家あり吉原大全中ふも豊盛屋新
義と云る者あまたの花女を抱くて繁
昌せりとなり其後京今の大門屋より引又
今の新吉原ふりより其旅ひとつあるよ

きて松の位の散らせあり全盛ひくく弔ぐさ
ぐふ元等力乃ぶべしとも思べすかくて三
人の聖達い途中より三牧めて駕を乗せ
大門よりけかごらんかと排ひ夜級にくろ
ひ大門よ入と元い鞠弓如さりかご骨稽
ふうう仲の町九ぐの長屋ぐ又世人乳
子先を見てあぐり給べ吏物立出さるとく
媚壺ふどもり壺よ祝茶盃とのてかし戯

前屋へ美者をたてらせて仕丈をけ
させ有べしかゝるめのゆしゝかどありてて
とくよ仕丈美者小提灯付させ紙前
屋一ゑり二階へ上りゆく唐士ゞ唐ゝ女
ゝ子ゝる 孔コレ 鬼子宮くさゝらせく 太十二 宮
ゞよふ仕ゝりゆす 釈 神儒佛とゝふかゝら
ゆゝゞ上ゝでゝゝ 太 ゝれでゝゝうど 儒仏
神ゝふゝりゆゝて 美者 今日へゆゝゝゝゝ

えでゞさゝうます 釈 されへさゝふゝゝ一丸
へゆゝと一代ふゝ 孔 ゝゝよ宮へ和國ゝ元義ゝ
の 美 イ主 ゝゝゝこゝゝ宮くれ宮ゝまゝゝゝ伊
ゝ風雅ゝゝゝ源氏 胡月小万葉集こゝ
らのゝ和ゝ奇八重垣ゝ 孔 投入へゝ仏ゝ香
を含んて白丸を 色方 龍ふゝて城を修ん と
欲ゝゞ 能ゝ市ゝ出拵べゝゝゝゝ
たゞゞゞゞんをゝゝゝ 太 隣へ行んと云おゝゝん
けゝんゝと出ゝて行

ぞ 丙 異端さんてはざりやを 孔 アノ好ハやを
ようぞ 釈 コレどんぶ客人さ 丙 隠居さんでご
さうやを 太 ハテナ 孔 酒ハ百茶の長たり
盃を拾ぞをを 因 私ハ
肉て呑んさのがまさ 釈 ナセ そんかふ
砕さ 因 其そさ朝日小瓶子の酒を呑ん
ぞ侵さ 孔 うちを云ってもそんかふ和
尚 釈 酒いよ戒の其一ツたろうろと執着

心ぐ発る 因 どれ敬とをふ 丙 ろうちぐを
いを 釈 ヲトシ 有くこを一ツ請さ不ハ徐よ
西方でいふくて 仏 方極楽浄土ぞサアを
こくさをふ 因 いをぐたすせを 因 一ツ呑の之
釈 トレ おきぐたぞを 孔 和尚の敵野郎の盃
釈 それハふんるぞ 孔 ハテ蒲萄美酒夜光
杯ぞ 因 欲呑皆無上よこだす 因 怨をか
かぐうおふを上海せを 孔 再せべ是可く

たさくよふ 図 そんあらおあひ 秘 りちやい
やあいらんよきくそのを 釈 敬へまく
あれがそる 図 宴へ生ーあんーアレおがそんて
釈 島子とあれいあがすまきるへかがぶ 太 者
を中ふ蓮根混沌として鶏卵の如して
きふ 図 さあうあらはあ押さざすす 秘
純子をうへてあひせて 図 これへ迷惑へまぐ
あるく 孔 慢沽酒莫愁ぐ 太 その灯明の
きんを 図 工 太 ナニ 灯明じやアねく燭燭のきん
を切らせへ きんを切る 釈 それで光明偏照
十方世界ぐ 太 ホニニ人の面ぐくとうるく
孔 島子ぐ来惜面へ大ぶ光るの 太 池の弁天
ぐ不へ行くゆりがげ小位言へあつ人中た
ー方純子をおまるのるとーとくこんそのあう
ふ孫右衛の通り称るのありとぐさるづた若者へまる
図 ちとらんぐゆせるう 三図 マア呑あんー 図
さうたら大ぐさべ海ーたトーツうけて盃をとと
盃孔子伝中うさや

はさうを神(ぎ)

あげさせう 太 いさぎかふろ 医 さあうあうこと

たくへ行て糸ゆうはせ〳〵 ト立て 和函 早苗

や 元 アイ 和 ちゝと来や ト伺申さ〳〵申さつい

でよたどこゆど出しふ

ぎる 釈 今夜いとんざ宝ひ火宅の中でさ

とくられね 太 火海の火が間外ゆくよ茶

つる 孔 長をあさげべいよ〳〵たこる 唐土 後

野や炭を出してたぎや 医 アイ 困 とゆ

盃をあいゝん〳〵おていきや 医 アイ 梅次ぞゆ

其砂糖をめけてぐせく 困 おいゝんちと

さゝげはせう 唐 押〳〵中ちいせう 困 マアせ

ひく〳〵トいふ内新造かゝこと 孔 斗箭之妓何

足算也がうてたよ 狂 張ふふゝさ 狂 くわ

のくさん一す吸ひけてくゆんー 狂 アイ 狂

アレちんぐゞゆうい ちねくきくいーた 釈

コレおの子宝〳〵一すまやいものをあろふ

[秀] あんでごせくそとそくまるふところ [秀] どれ
又せあんしおろふのめざのふ [弱] あんでおく
そりちふもんあんし [釈] それへ菩提樹
といふおざ [弱] ヨやおろふのめざのふ [和] コレ後
野宮くれて来てえんせや [虚] どれおろふ
のめでおりいそこ園さんえんあんし [三]
ろんふねく [弱] ろとおらへおんあんし
[釈] モウあくく [太] とんざりのをれてまく
の [弱] 梅治どうりつちふ一ツくざせく [秀] ひつち
やアいやトいふおろうちさをやていの [亭] 先祖へ
はそうくではざうはた [三人] 亭さん
おさあんしたろ [弱] おろさんへどふおあんし
た [太] やはそへは出ろ [孔] は出の学問れ合せ
さ盃さそふろ [亭] 仕載と金ゐわたませう
おふーと方 [旦] ちとはをひ拾ーます [孔] 一盃
吸物れまる
呑つせく [亭] 山盃をとーませうろ [釈] イやく

是で始て一ツ進上【太】進上大盃敬白【巴】
いろさ返それハ大きふめのでござりますす【釈】サア
とれよ女御ちられまる【安】ハイ内ぶうらあげます
【巴】さよふならいさゞ汲ます ヨト、つぐ返
い【亭】是ハぜひ一ツト兎の毛を【太】そこまで
如意満足ぞ【孔】臨機應変とその盃ハ
息子ふさうつせへおきが肴を仕よふト
花を【巴】是ハありがたうござります【亭】

こちの杯ハおめでたんへあげ升せう【眉】ころ
ちへ【形】いろちが敵ハ悪ひそ【孔】此次をちろと
そろちへ出ろう大きさよ盃苦した【太】コレ甚子
息んドをちろと明けや夜ふとの風よ吹ら
れると悪よさめる【釈】真如の月がとんださ
急さ【巴】さ出うふるあふさへあげます【太】
呑ますねへそうだこモウおさへめへ【巴】ハイあつ
がうれさりますそろ トいつて【形】流亭さんへ

へどこへ行あんーた 亭 江戸あるたさ ホニ 今
日あるこの天へおよりゃ 孔 ソリゃア 寄きびよりつ
ゝきのふハ西方川
備ゑ出さがらふハ内ゑ忘然ゝ閑居ーて
居さりのを工、残念内子騫ざ 釈 それで
もおれハはさう殺生戒ハ破らぬ 孔 ホニ
和尚ハ人をよふと思つゝけ大りゝひ
ふ事がある 釈 あんざ 孔 釣不網さがきのふ

ハ網ハ出さ不がつたんがかゝりてきさ 亭 つゝん
とゝく 因 アノ仏檀よあるのさ 曽 こゝハ大笑
ざ天へ 笑 よふれ出ふかされ 亭 大ぶ
主ふれさんそね 笑 されださ 三 おゝんとん
たをこを吾ふんー ト吸付て彩 笑 アイ 因 酒
へどふさ 笑 おいさぶたゝませう 亭 ひとゝ
ろゝ 笑 どふもはゝるゝろりゝはゝうふふゝ
りゝて 孔 酒潤身ざ董卓もてざーだぞ

亭 おくとんでおりひ出したるあかもぬくう
トつゝれうう三味せん弾れ来ると 時 これへどうぞ
万里佳陰五調 玉露治意きくる
掛もとふ出かされ国ーた皆くそれくかあいさろ
よ暗ス 孔 登楼万里春ざ 万 コレハ有がゝ 釈 欲
蘇の喜薩蹉ちりつところちく 四 アレハ洞さん
トーかんし 五 おれがどぶーた 佳 ごふーた芙
蓉とちう菊の 万 きくのーたハ遠ろれど
万× 露治さんおめくりところちくゝ家んか

四 ハイそこをちうと 五 あんざ蓬莱山を生
どうて来るとか 万 意めたちうが出さ 佳 下
畢をいうちもんか 因 子代のためーを湯
雛の松 孔 歳寒然後知松柏之後彫也 釈
邑不異空空不異邑をもれかゝ事ざ 四
モシそれいあんのすでは行りやを 釈 あんのる
ちおんれのちうぬく 彩 ヨヤぢかちうん 佳
時よちと皷を始めぬくう 万 今洞ぐていやを

ゑふ 太 かひさふ鼓ざ 孔 鳴鼓動春心ざ 釈 燈燭ぐ寂滅為楽と
あつて 巨 ぼへ今はぎちをぢでは 五
た 五 盃へどこふある 亭 笑ふあるぞ 万 それ
かつ呼盃とそるづよろろ 亭 ちんあらべ
嘉流ぐ 九 いつちやァいやつウ 佳 ぼ流さん 佳
見へどうだ 五 そんかつ者をちふこの松
茸かどぐ好そふざ 又 ヨヤだかついやりつ

ちらへそうやァきつぶでぼざいそ 五 それで
も嘉茸松茸といつぞ 万 いやかつ下へ食
ぬく 巨 よんていけちろぬく 孔 あんざろ
指よちあて居るの 佳 あきであえくぐ触
あつ海ちて 五 どれちぐよかーなちあて見
ふ 又 どふーておめくよちるりめぐ 五 サァ
サァちいろへちいつたぐやつけぬく 万 ぼくを
端ぐけさろせく 五 どふーてえても板ぬく

をへ雑説 弱 ヨヤだろらーい ヨホ〜 五 これ佳
陸子 佳 あんざ 五 そろちをわさう 佳 それ
ようろ トひろそろ 太 おうげでぬけたとき 五
アし 跡ざそれ海さ 丙 ちとおまへるあげ
まぜろう 釈 盃ろふさろたく 万 をへこを
つるぬざ 孔 そんろう拳ろるゆふ舎と
そろがいそうおいうざ方ふへかいてん
だ 万 ろぼ流でけざろ海をけれ和世と こんりてん

あり方里とふ 万 をへいたまろぬく 太 和尚八芳
くまけろ
町ろでろろんへ人がおそれこおそき
むよ 佳 トレころちくのろせへけてそろざ一
ろん氣ろまぜろう又佳陸こひつへ閑口 釈
まける
実でん天上天下唯我獨尊ざ 孔 鄭聲の
雅楽を乱ろ始ろう はにろくく蕊ろあり二てう 国
ヤヤく 弱 いろそおりろふたくーた 孔 洋洋
こそそそそそそそそそ
乎盈耳哉 巳 ちとそをかてけまをう

亭 おぜんが出ると 太 あんざ皿鉢が並んざ
山田の大蛇の埒のよふざ ぜんが出ると女帝立てり物ぞう乗物仕
る釈迦さん〜 羽 ヲヤぬしゃふきこのひるゆを
そをたてる
ちるんをかうことさんえんるんし 秋 これさ
わらがうめのとあざ 四 それざろても 万
ろちゃ酒小ちょふノウ 佳陸 力 たんとお
あんるんし 佳 ばちそうだね 孔 ば独をの
玉酒聖人の飯乾天の旅あく萬容ふむ

ゑ有ふちと砂ひ拍とをざ〜ふ 五 見ふとふこさ
ア ま ま せう 亭 おまえ方ばういあされまし 太
かくきこ〜わ〜てへモウいけぬく 釈 おれが
飯ハ不増不減ざハ味飲食でも喰へ祝く
亭 其そづさばゆがるゆ〜たお茶よでも
ばつけかされはる 釈 そんふ事ふ〜て
空こ寂ことかつこうふトひせる 孔 食不詰
ざ 佳 あかるモウば仕也でばざうはそう

きんどは 太 海んざるわ登て天をみる 五 又
ゝりりはたり 太 天よ八重雲がくゝ
釈 ホニ紫雲ぐたかし引さの 乳 紫の月を
霞かを恋し 四 無住さんおめくさうきたや
のゑん世よいかをそゝ 四又 おちるふさんよせ
うゝうせうなゝ役者せうゝとゝふ
のをゝうってめさはう 四九 アリやアいってた
りゝいゝ 五 せうゝうゝくゝ関あい

ゝろせゝ 四又 ゝろちやちんかゝるゝへきりやせん
五 それでもせうゝかゝくゝとゝふどやアね
へゝ 佳 この子もモウ初メゝりげきゝうゝ
先別せうゝだゝうゝ 両人 いゝちやアいや 五
それ其初メが 釈 初メといくを李延年が順
を作さどやアねくゝ 乳 ケゝどをさあれも
李伯が詩の名花傾國両相歓ゝ分へ流
行さのゝ 五 あゝさ方へ李伯うへ

てゐたりはもろ 孔 そんぐんくやすひ 太 扇
屋へ行と笑ひころけ 五 ちやうでゐざうま
す 滝川さんく余程出かされはつとおろ山
ひへ宗匠かりとやうを茶
されるもでゐざりまして 孔 おれうわくも
拵物をよこした紙も寒ふあるとふところ
釈 かんざこりやア滝よこちらのへ毛穴の
よよ吸筒ろ 太 きろひ滝ぬるざ 釈 それより

山吸筒へかんのうだ 孔 イヤ酒をえると アノ
男へ金ざよ長安市上の酒家で一斗呑
て酔ひ拵れて呼び半きろてもゆるわくそれ
から内ぐぶさてかろてこんな事を始めて
杜子ぐ 丙 杜子美今ぐぶよりは学問をかさ
りはもて 釈 山拵物へ陶淵明が茅のもろ物
よりいろひ 刀 いろそきれくざわく 四 おまえ
さんそうよをいろちふでざりゆ 羽 かよ

いろちふんあんー 孔 そう大勢でへどふもかうねんで 太
もくぎが不小もまぐこ牧あつさつけ 釈 そん
あうこ牧一ちよーてこふそるがいくおれが
罕云をいふうそそれを能くそうりの
小半ろが 大せい あんうく 釈 マアにをく観音
経よそふサア妙法蓮華経観世音菩薩
普門品第二十五 孔 サア あーくいつてこと

大せい どふもそふいうそれやせん 釈 そんかう静
うふるふ小そふ 大せい それがよふこせそそく
釈 引導小そふ 佳 芒い亮んざるゆう暗うさ
形 サア 云あんー 釈 それにうくおりんこれい
カメ それちうく小級入れいとふもおかー
ろていうれやせん 四ル 十二 さおりんられで
わくさァふ 形 云あそなんー 釈 おれふつい
て一不小大ぜいふがうろうそれつうく

おりんこれが人間萬事万中の浴の如く
こんアト大きふ殺をもるた 大世ヨヤ こうこいのふ
四 いろちゃアこひ射ふんをそ思ひやたよ 四
そんかるいよりて見ちろちふられてお仕ぜひ
ふんし 太 いろそふけてひろるせるらいく 四
それらよろろふく 四 ころちくふけふんし
釈 それふけく 四 ろちろひろいこ高ト持て丹けるふんる
大世 ナニ いろちてあこまてト云ふこ高下へ 四 伝の

たそうぐしいを浦さん冬茶のくさんちろと
ちづろふちふんし 四 ちところちくいろ
しゆりまし 四 諸客入床ぎふんふふろさ 四 い
ろさ海よふ出ぎりみせう 太 御遷宮さの
万 サアは出かされ来し 五 とろちの方さふ
釈 ぎふろ四人よ三夏域ざ是ようそれくふ家源
神一人家ふかふと出しちろ 四 おさむしうあ
むさ出ふとして居るぎいくふ来ん
りいちろう 太 むざ出や伝ろをして居

ゆーた 和 たゞこをおあんあんー 太 アイ 和 ぬー
やァたーゐゆの町のちゃ 伊 せ屋でゐん
うけゆいーたよ 太 ソリヤァいろ 和 たーゐ初て
の月ゐんのぞん 太 ハテ ふム、それくあのはい
八幡げゆるてゐやゝ来てふもてそき合よ
来てこたいでふ来てゐさはざろう 和 その八
ゆんさんとゆうもワちちらげ内へは出ゐん
ちいーたねーァおをすうく 太 揚 ぎ ろうぐ
度ゝ出合ゆて 和 今でかどろくは出ゐん
ちく 太 ナニあまいは川ゐてゐろゐろく
いゐんまり来ゆせん 和 ぬーの事をゐろ
ちやァよゝちろていゝまそよ 太 どふーて 和
どふーてもさァゝどこの女郎さん方さろ
ちういせんげ出 い と アさんとゆうの所で内
をびくうゆうふちゐんーて居ぞげを仕
ゐんーたといふ事をきゝーた 太 ナニそれへ

とんでうせて 和 うそでへわろせんそれか
らわしのをんしてあるんをうすめさんと
ゆうこといふ義者成と戸隠さんと素人和云
うあるとゆうこと何んとゆうこといろてむりよ連
ゆてかいんをんしたといふ事をたしかふ笑ひ
した 太 程をさ海くふは滝宜ぐ出るの 和
今夜かどへつれ合では出るんしたろうね
太 付合あう情事に形造をわけるへけ

和 ホ二 形造成をわけるんを方へ情のか
ひめのでおるそよ 太 を情きいろう形造
笑ふ 和 ぬしたちもそんふさらさ 太 いろち
らへ向ふ次第で罷利生ぐあるのさ 和 を
ちつまをゆうこと 太 たとへばわるうね
しにをごいい後でさへおきべいろでも
をふ祈さ 和 あんぶころちでどのよふな
思ひしてもやつぐ和言ぐ 太 ひうら

い西壺を祢とまるかゝ人も誠さて
ゐつてい無跡ゆて 和 だまされかんさて尻ざ
太 そんゐゝ拝されかゝて立てゝらいゝ老い内
小いりゝやせう 和 りゝやァそふとねしめ
ゑいゐんといゝまくゝえんか島子さんざの
祢さんだのと斗云ゝゝ老ゐゝらしき
やせん 太 ゐつちゝゝゑゝゝゝちゞゑゝ御
幣と云ゆて 和 ふ清さんとくゐゐく

おつふゝんでおりいまそね 太 どこゝゐひてい
るそふで大ぶさむい 和 ゝさゞいゝそゐひて
いゝゐゐかトいゝゐゞゝかけゐ祢ヨヤ紙ゞゝゐと
ゑびいゝたトきてせゐでゝゐわゝァ紙をとこ
ゐんそゆ 太 徳んでゐんわくゝゝらへ其色
さ 和 ナニタんゞゐ送誠めゐふかゐひかべ祈
らそとても祢やゐうんまさこんなゆ
そゝてゝさゞひゐんそゆやゝのふのえ

まるやうに志いせうかくどふぞきるん
し 太 そんかく神わろ〜う湯祈祈をそ
るぐい〜 和 どふでも志ひせうかくとんど
一人で来るんしちんぶん 太 きやア来
よふぐぜんさい今月振(ふり)わくけりやア
ふりわく 和 うせをさつたかんそか 太 な
のるだ今をぜんさいづけさのぐ 和
ふぜく 太 出雲の方(かた)(様)ぐんの出佐ふ

ぶくのぐ 和 ちんふくく形前形遠屏 彩 ちの
らんちと双紙をかしるんし其仕ちくず釈
ちるこそ 三 ちくしるんし立つくく麻入くく
ぶりをし
楽よくく麻入て居さのものをちんとおと
た 三 ちんまり酒をおちんるんをちくそれ
で 釈 そうどやアわく枕えで一切往をかく
わどぐまゆをとりてこの方みれりをひて
居るかく 三 ふふさ志げのくさんといふ女

所流の宿化が板をえて来あんせんから
それでみを出ーいろと 釈 生者必滅へ
浮世のあり さ酒さきけくくれいと遠さ
くる事もあるのさ 三 ちとそちくよん
あんー 釈 とんざをあてくぐでで金佛を
抱ひてこ藤さもうだ 三 ねーァいろそふろ
て居あんそね 釈 飲酒戒をもるから 三
りちやァとんざもせていそよ 釈 もせ

たら女げあれいそそと 三 ちとそろよふ 釈
悉達太子とおれが雅名さ 三 そそふと
とをいーあんそそりやァそそとねーの
方へどちそ 釈 天空さ 三 をかーい
てんぢくとん雲の上へく 釈 そそさ 三 ひ
つちやァ雲の上へく 釈 登りてんとあそ
よ 釈 天人よ成てるさがく 三 そふーたら
若衆であくてよもろせられ 釈 上衆

の天人も退没の雲よかおーむ五衰と
てあれかも苦ごあるのさ 三 ヨヤわーの
ゑんのさいかたろがあれもよ 囲 れ
ろといふろへ夜るるくねご 三 よく茶
斗りえあんて 囲 生れさは家で産湯
かけたろそれでさ 三 どふそでわーのろ
へ茨ろでおーてあの坊のおつけでかをる
それろうだと毋ろいて毋家だと

ぬちひろろ 囲 法後へ坊ぢのろぶさ 三 わーア
おきゑ元ごれ 囲 ナこ医者さ 三 かくあんて
か和尚さんでおくさア 囲 和尚ろ如何賞も
とんご事ご孤ーア邑即是空頻脳衆生
則菩提ご 三 茶ろさわっちろが死坊さん
ごお出あんーたよ 囲 寄いやだろふの 三 ナこ
わっちやア坊さんごてでおくて 囲 おきやア
ぐれ外面如菩薩内心如夜叉 三 いまのおち

さん方へえんかとひのをてかこさんを
はちて居かんをそうだね 訳 妻子珍宝及王
位臨命終時不随者おいらへかとひのゐ女
房へきてくひさ 三 そんかうやーへ情がねく
訳 真實不虚かうあるのさ 三 あるところ
た客人小情のあるためーげねく 訳 はは未
郎のあげ一そい呑さひ 三 ようなんーきみ
りるひ 訳 あんまりうまげ有うらぶらこ行

されさそふど 三 死んで仏よなんかんー 訳
二月十八日じやアあるめくーあるよ所よホニ多
げ呑てく 三 あげやせう梅酒ヤア甚子ゆう 訳
ゆうちであるを 三 ゆを浦さんうどよでゐ人
ぶあげ呑てくといるうーあるからえで来
てえかんー 訳 そこの茶えを出しひす
おゆるーかんー 三 どよぞお 訳 ゆいを 訳 ぞうを
ゑゑれりえて来ん 訳 サアくんでできひーた 訳 これへあり

ごひこれでうかこゆて 三 ひごをいるぞと
おあんあんー 釈 むざ方俊とろて先も功德
ざトあをテモいつきびざ嫉鬼の如くめこ
たろこざ見で成仏しゆて 形 そんあらお
体あんー 三 アイ 釈 諸行無常とひごくハ
ハうちと涅槃ふ苦トスあざ苦く苦ある
十万億土のろハかうてたふ遠ひぞてざ
そのこ 釈 だれざ 太 善哉〳〵我ハこれ 釈

長ろうそいらうせく 三 おそいうあんー 太 それ
ようろ孔子さんがあふう逆難ざそうで小云
の望がそる 釈 それハとんざ事だ 太 青樓で
小云をいのハりろくの滑稽ふもこひ
てんざあの人ふも似合ぬく 釈 形ざアある
めくう家を出るぞ愛別離苦ざ 太 邪見の
室ふハあちぞざ孔子ハうんてもこれま
トスあくのろこざ孔子三つぞこんの上
いでやえトりふたざと呑あざ〳〵大きよあくたいをつくあろ

こゝろをそそむけてうたがはるゝ 孔 羽華帳紅閨ふ大平樂の巻
物へ鍾放蕩子赤有うどふも雲ぐもうぜう
ちゞ如此踏張を得るのも天の令ぜるふう
きゝぬくゞ面の学たる大学ふるとされど
も実だ学ら如れ徒行の通ずよハれて
きをあてのうあんざら糞土之墻の如く
ふ行あるて閨隅ふ退て尸の如くぶさ
つてろうる危邦不入乱邦不居こんか

不ふ居よふより寧帰興ゝ〳〵ト出てゆかるる
 仁 仁んでおくそだかゝいたいをたく事がついぞある
たいそぬくあくたいをたく事我れ人のごゝか
又人おくたいをたく事我れ人のごゝか
あゝず悪さんあらう志めんと思ふハうわが
胸中の一ツゞ客人の善不善ハ踏張の勉よ
るゝ 秋 コヒ たゞゞ其邪気を滅してちゞ
ふさうせんおとふしくくれば其功徒

ふとして洋銅熱鉄の初舎も忽功徳地と
変後世寂光浄土の如くふるると宝笈図
印陀羅尼経の通言ざ 太 和尚の深紙を
引てのこゝはふゞく今百へ〳〵〳〵く
て酒でも呑んでうくれぬく 孔 宝の酒か
呑るのゝ者へあんざ魚鱠而肉敗色
悪臭悪不食ものゝうつまるのゝうと
わくもぬく 異説 ヤあんく

だだかゝしい 孟子 こんざ客人ざ 太 乞へどゝかこだゝ
不調法ト就と こんさ人よあつこ 釈 イヤ 要要
茶ほゝしい 老 いゝさ食へーざゞてもめゝ
つこ小こさいものゝ孔子ゝもとゝーゝもぬく 孔
サニ さゝいふゝゆさ 釈 三人で砕ま砕さるゆゞ有
さゝけ其侭ざ 孔 おいゝゝ異端の骨長ざの
和尚をべ全国外ゝたのと彼て虚無空寂
で一人でゝあれるの 太 掘でゝ有めく未社の

神ぐ有く 釈 楊朱黒羽雀でも来さう 老十二ザ
招楽さそりやアそつと三人ゐづゝ てきき
くだつけゞ中ゞよくゐつさの 死 後世恐く
中ゞいゝ不ら鼎足の如しだ 罠 毋のゐとさそぐ
きゐゐの毋よあくずゐ人一不よ大ゐをゆふ
釈 弘折玄の祝とゐよゐでゐゐいう 困 地の三人や
の室三よ弦牙を三挺出せと命して ゐてさ
三人 きろいゐんざ 長僧や逆 図 ハイ出逆よ糸はた

通詩選笑知 庵句選五言後句と尚芝の
風流小仕立さるたりしろ紀ず之
游都酒美撰 柱芝の柳折後而れ市を毒あ数
紀しそれくよ孫を加へるかと
柳巷化言 脚落とれとし出とゐ号ゐて柱
芝の面ゐ見突せゐを集さる玄之

天明三癸卯正月日

地本問屋 新吉原大門口 蔦屋重三郎